# メイ・ウェストの身体を読む

坂井　隆（熊本県立大学、アメリカ演劇）

## 1．忘れ去られた女優メイ・ウェスト

1930年代のハリウッド映画界において、その豊満な身体と特異な演技スタイルとで一世を風靡した女優がいる。メイ・ウェスト(Mae West 1893-1980)である。死後も熱狂的なマニアによって「イコン」化されることになる、伝説的な映画スターであるが、同様にイコン的な女優、例えば、グレタ・ガルボやベティ・ディヴィスに比べて、現在では知名度が低い。しかし、彼女に関する伝記的事実を参照すれば、当時の彼女の人気振りがわかる。すでに1920年代にニューヨークの演劇界で挑発的な作品に出演して――この時期、劇作にも挑戦していた――人気を博していたことを聞き付けた、パラマウント社は年に2本の主演映画を撮影する契約を彼女と結ぶ。その結果、30年代には毎年、少なくとも1本の主演映画が封切られ、どの作品もヒットする。さらに彼女のイメージが時の大画家サルバドール・ダリを惹きつけて彼女をモデルにした絵画を描かせるかと思えば、ウェスト関連の商品が数多く売り出されて30年代アメリカにメイ・ウェスト産業も花開いたのである。

当然、人気と没落は表裏一体であり、ウェストもその例外ではない。映画の検閲をめぐっての政府との繰り返されるトラブルやウェスト自身の演技のマンネリズムが主な原因となって、1938年の主演映画『毎日が休日』を最後に配給会社であるパラマウント社と別れる。その後、活動の場を古巣である演劇界に戻し、芝居の出演と演出に専念する。それと並行してラスベガスなどで「マッスルマン・アクト」という男性ストリップ紛いのショーを企画し、それにヴァンプ役で出演したりする。このような活動にもかかわらず、1940年代以降、一部の熱狂者からの支持を除いては、以前のように女優として注目されることはなかった。

しかし、1970年代に突如、ウェストの人気が復活する。彼女のイメージがピンナップ写真やポスター、そしてポップアートの作品などに利用され、独立系の映画館では、30年代の彼女の主演映画が再上映されてカルト的人気を集める。さらに

『マイラ・ブレッキンリッジ』(1970年)や『セックステット』（1978年）といったＢ級カルト映画に出演し、年老いた身でもって30年代の自分を再現する。しかし、このリバイバルは、ウェストの真価が認められて起こったというよりも過去の映画スターの卑俗化した、今の姿を見たいとする、観客側の欲求に基づくものであった。

## ２．ウェストの演技の特徴

銀幕の上でのウェストが放つ魅力は、その独特の演技スタイルにある。過剰に装飾された衣装を身に纏い、男を性的対象としてとらえるヴァンプ的な視線を維持しながら腰を挑発的にふって闊歩し、エロティックな意味が込められた両義的な台詞を放つ。批評家から「マンネリズム」と酷評されようが、彼女は、すべての主演映画でこのハイパー・フェミニンなスタイルを変えることはなかった。

ただし、ウェストは、その独特の演技を独自で開発したのではなく、それを確立するために参考にしたロールモデルが存在した。まずは、黒人ヴォードヴィル芸人バート・ウィリアムズ(Bert Williams)である。彼は、20世紀初頭に「ブラック・ミンストレル・ショー」でのパフォーマンス――黒い顔に黒塗りの化粧を施して紋切り型の黒人像を演じる――で人気を博した人物である。ウェストは特に彼の“Signifyin(g)”（字義通りの意味と同胞に向けた含意とを使い分けるレトリック）を利用した台詞術に興味を持っていたようである。おそらく彼女は1930年代に当時の映画検閲を欺くためにウィリアムズの妙技からアイデアを得て、聴きようによってはセクシュアルで卑猥に聴こえる両義的な台詞を生み出したのであろう。

また、カナダ出身の女性歌手エヴァ・タンゲ(Eva Tanguay)もウェストに影響を与えたと考えられている。タンゲは歌唱力ではなく、舞台上でのパフォーマンスの奇抜さで人気を博した人物である。自身の身体的魅力を全面に押し出すタンゲは肌を大胆に見せる衣装を身につけ、挑発的に腰をくねらせながら歌を歌った。このスタイルがウェストの演技にも大きな影響を与えたと推測される。というのはウェストの母親――彼女自身、若い頃、舞台女優になることを目指していた――がタンゲの熱狂的なファンであり、娘をこのスターに何度も会わせてそのパフォーマンスを学ばせていたからである。

さらに女装芸人の影響も無視できない。ウェストは1920年代後半に『ドラッグ』や『快楽人間』といった、女装芸人が登場する、当時としては過激な芝居を書

き、自ら演出した。これらの芝居の上演を通して彼女は女装芸人の所作や台詞術を学び、それらに基づいてハイパー・フェミニンな、自身のペルソナを形成した。興味深いことにそのペルソナに潜む二重の模倣性、つまり、「女性を模倣する女装芸人を模倣する」ウェストに多くの観客が惹きつけられると同時に彼らはその演技をいかに形容したらよいかわからずに困惑もしたそうである。

このようにウェストの演技スタイルは、複数の先達の演技スタイルを流用し、さらにそれらを混交させることによって生み出された、かなり複雑な構造をもつ。ただ、その原型となったものの共通点をあぶり出すとすれば、それらが主流文化から逸れる、異端なものであったという点である。この反主流性を自身の演技に取り込むことによってウェストは多くの観客の好奇心を刺激し、「珍奇なもの」を見たいとする彼らの欲求を満足させるスタイルを確立したのである。

## ３．ウェストと「キャンプ」

この演技スタイルは、しばしば、「キャンプ」(camp)という美的感覚と結びつけられる。『オックスフォード英語辞典』によれば、キャンプとは「これみよがしの、誇張された、見せかけの、芝居がかった；女々しい、または同性愛的な；同性愛者に関連する、またはその特徴をもったもの」を意味する。ウェストのハイパー・フェミニンなペルソナは、キャンプの意味に従うように、「誇張された」ものであり、また、「同性愛的な特徴をもつ」ものでもある。

ウェストは、この感覚を意識的に利用することによって、銀幕での自身のパフォーマンスを効果的に行う。ここで注目したいのは、キャンプの「演劇性」(theatricality)である。エスター・ニュートン(Esther Newton)は、キャンプと演劇性との関係を分析し、「キャンプは3つの互いに絡み合った意味において演劇的である」と主張する。その3つの意味とは、①キャンプは様式（スタイル）であるということ、②キャンプは絶えずパフォーマー（演技者）と観客の関係を孕むということ、最後に③キャンプは「役割を演じるものとしての存在」や「芝居としての人生」といったメタファーに満たされているということである。

ウェストは特に2番目の意味を効果的に利用している。彼女が主演した映画では、必ずと言っていいほど舞台上で彼女が「パフォームする」場面が、作品のプロットとは関係なくとも、挿入される。これらの場面で彼女は二重の意味で「見られる」ことを意識する。つまり、映画館内の実際の観客に見られる自分、さらには映画の

中の登場人物としての観客にも見られる自分を演出するのである。さらにそれらの場面でのウェストの役柄演技にも注目する必要がある。設定上はウェスト演じる主人公が舞台上でパフォームするのであるが、その役柄は、一先ず括弧にくくられてウェスト自身のパフォーマンスが呈示される。そうすると二重の観客の視線の中でパフォームする主体としてのウェストの存在感が強化されることになるのである。例えば、最大のヒット作となった『妾は天使ぢゃない』(1933年)ではウェストはサーカス団の花形団員タイラを演じる。途中タイラはバーレスクを想起させる見世物小屋でショーガールを演じたり、ライオン使いとしてサーカスに参加したりもする。そこで呈示されるものは、登場人物としての観客と同時に映画館内の実際の観客にも見られるパフォーマーとしてのタイラである。しかし、ウェストはショーガールやライオン使いとしての役柄を自身の独特の演技スタイルで行い、結果としてタイラとしての役柄ではなく、ウェスト自身の存在感が強化されることになる。さらにこのパフォーマー（演技者）と観客との関係は、ウェスト・リバイバルの流行に乗って70年代に制作された『マイラ・ブレッキンリッジ』でも利用されている。その映画の中でウェスト演じるレティシア・ヴァン・アレンが黒人ダンサーを引き連れて豪華絢爛たるレヴューショーを行う場面がある。そこで呈示されるのは、黒人ソウル歌手オーティス・レディングの「ハード・トゥー・ハンドル」を歌うウェストの姿である。彼女はただレディングの歌を真似るのではなく、それを彼女流のキャンプに変容させる。「ハード・トゥー・ハンドル」を歌っている間、彼女は絶えず官能的に身体をくねらせ、周囲には挑発的に腰を動かす黒人男性ダンサーを配置することにより、その歌を極めてエロティックに響かせる。ここにウェストの往年のキャンプ・スタイル――ヴァンプ的身振りや、台詞や歌詞にセクシュアルなアイロニーを込める方法など――を観察することができる。このようにウェストは、自身のスタイルに黒人の身体性を付加させることにより、それを見事なパフォーマンスに仕立てる。さらにそれを二重の観客（登場人物としての観客と実際の観客）が見る状況を作り出すことにより、彼女はそれを一種の「スペクタクル」へと昇華させているのである。

以上のようにメイ・ウェストはキャンプ的演劇性を利用することによって自身の身体と演技を効果的に観客に見せる術を心得ていたのである。

＜参照文献＞

Hamilton, Marybeth. *When I'm Bad, I'm Better: Mae West, Sex, and American Entertainment*. Berkeley: U of California P, 1997.

Leider, Emily Wortis. *Becoming Mae West*. New York: Da Capo Press, 1997.

Newton, Esther. *Mother Camp: Female Impersonators in America*. Chicago and London: U of Chicago P, 1979.

Watts, Jill. *Mae West: An Icon in Black and White*. New York: Oxford UP, 2001.

＜映像資料＞

*I'm No Angel*. Dir. Wesley Ruggles. 1933. Videocassette. Paramount Pictures, 1993.

*Myra Breckinridge*. Dir. Michael Sarne. 1970. DVD. 20th Century Fox, 2003.